

羅浮天台互に對し
長江黄河等しく流る
此れワチカンのラファエルか、
彼れシスチンのミケランジ、
其大なる星二つ
無知の暗黒たちこむる
烟霧は西に光蔽ふ。

ミケランジェロ及びラファエロ

崇大の悔慢一代の俗を見くだすミケランジ、
美の一切の創造の靈にひれふすミケランジ、
八十九年金剛の意志を貫くミケランジ。
萬華の春を粧ひし巨靈次第に去りし後
なほ夕陽の照す影長空の雲いろどりて
更に光を昇るべき無象の天に追ひし人。

あゝ群小の嫉より苦惱は常に山と積める、
 さもあれ法王帝王の敬と愛とに包まれし、
 光明暗影濃かりし巨匠、
 比を樂界に求むれば
 ラインのほとり月光の曲を夢みし天才か。

緑眸の女神アテイネイ
 金甲穿ち雷霆の
 神より生れし跡に似る

カルララの山切りいだす
 マーブル生きておほいなる
 モーゼス夜半に星と語り
 シスチンの中、神聖の
 狂に熱して幻影の
 群壁上に湧きいづる——
 聞かずや千歳不朽の言葉——
 『完美は小さ細さに起り
 完美は小さ細さに非ず』

ラファエル、サント、一朝に

美の圓滿の域に入り、

三十七の春秋に

窮めし巧百千の

はるけき遠き世を照す。

天使の如く美はしく、

少女の如く柔かに、

富貴、歡樂、光榮の

中に王公の生送り、

その若き死も皇天の恵の外にあらざりし

藝園の奇蹟、萬古の畫聖、

ローマみどりの天の下

萬神殿の中にして

香骨眠る — 幸あれよ。

南歐の詩人と藝術家

二十四番の春の華
東亞の曆に呼ぶ如く、
ルネイッサンヌ一代の
衆芳競ひて目を奪ひ、
アーキアンゼルの群に似る
チチアノ、コレヂオ、チントレト、

皆イタリヤの名の上に千秋の光瀝ぐ見よ。
妙音の群ペドラルカ、又タッソウとアリオスト、
メタスカイシオ、ゴルドウニ、アルフェリ、モン
チ、ホスコロウ、
近くは薄命のレオバルデイ、更にキアリニ、カ
ルドッチ、
天上つらなる諸星に似たり。

桂の緑、南歐の
 かほり、ミユーズの恩寵の
 豊けきガブリエレ・ダヌンチオ、
 半生の詩名縹渺の
 雲を傳へて、東海の
 空に響けり、——オリリエント
 こゝにも熱き血の潮、
 大いなる物高き物いみじき物に
 あこがる、青春の聲断え果てじ。

天その邦に幸ひし、
 超人の群巨匠の群
 あのかく飾る一代の
 文化の誇香は高く、
 遠く千歳の後かほる、
 其ほまれある傳統の

ガブリエレ・ダヌンチオ

時は風塵のあれ狂ひ、
花を啣める青鸞の
翼しばらく下界にたれ、
祖國の民の胸の琴
震ふしらべに鋼鐵の
絃を弾ずる時にして、
君勳業をアドリヤの
岸の彼方のフィツメの地、
陣雲の上劍光の

閃しめす雄々しさや、
十二の銀箏花を歌ひ
三千の金甲葡萄に酔ふ、
其も人生のおほいなる
生ける詩、君にふさはしき。
嗚呼シムボリストか、
「デカタン」か、
四十年前チュウトンの
馬蹄の下に荒らされし

パリ満城の恨呑める
 沈淪の時代——天に翔けり
 理想逐ふべき靈の翼
 垂れて現實の享樂に
 醉生夢死の日を送る、
 例へば 그리스 末世の詞藻、
 あるひは東方十六の
 胡人種あらびし世の亂、
 道窮れば竹林の

中に身を避け世を逃れ
 世を嘲りし高踏の派か。
 時は廻り世は轉じ
 チヌウトン敗れてラテンの光
 正に再びかゝやきて
 戦亂の餘燼消えん後
 桃李三千あらたなる
 春を再び迎ふべく
 雷霆の響、海潮の音

懷を放ちて飛び来るや、
 薫ずる翼ひらき延して
 花は文章を照らすべき
 三春の盛遠くとも、
 扶桑の民に心あり、
 血あり、情あり、南歐の
 ラテンの精華東西の
 文化の道をつなぐべく、
 虚空をわたる三千里、

高く四海に呼ばんはたそや。
 あゝ天才に老あらし、
 錦囊の上、黄金の
 線に鴛鴦をつゝる如く、
 更に詩情を富ましむる
 君靈妙の想湧きて、
 わがオリエント日出づる處
 天の一方に目をさわめ

生ける英雄の詩歌として
飛び来るあとに感激の
脈搏高く打たであらめや。

オクシデントはたオリエント、

光を結び香をあはせ、

坤球一箇黄金の

鎖にまよふ愛と愛、

太平洋二洋の潮

等しく花を泛べ去り、

へだてぬ空に浄界の

いにしへの夢、靈鳥の

百千の群舞ふ如く、

平和、恩寵、祝福の

標象の船飛ばん時、

その時待てる憧憬の

思につける一小詩。

14 ボーロ(マルコ)コロムバス(クリストファ)

マルコボーロ東洋に來り元朝忽必烈に仕へた。コロムバスの遠航はマルコボーロの跡に刺戟されたとの事。

14 世界の霸王、心靈の霸王

ローマの世界征服また中世ローマ法王の宗教界に君臨した
こと。

16 オリエント

Ex Oriente Lux(光は東より)

著者はオリエントといふ語のいかにも好調なのを好く。
オクシデント(西)の語も同じくよろしい。

16 名工レニ、

伊太利の畫工ギド、レニの筆曙の女神(オーロラ)の名高き壁畫(天井の壁畫)がローマにある。

18 エニスの公子

即 マルコ、ボーロ

22 詩美の國

古のギリイス國

23 イサス、アルベラ云々

アレキサンダア大王がベルシャ軍を敗りし戰場。其後軍を進めて印度に入つた、インダス、オクザスのほとりまで進みし

天馬の道に 終

「天馬の道に」註

8 アルコック、ホーカア、R三十四、

大西洋を横断して初めて成功したのはアルコック氏である
此若き成功者は不幸にも其後飛行の際惨死した。

ホーカア氏は其れに先だちて殆んど成功せんとして僅かの
着陸前に海に墜ち救はれた。

R三十四號は飛行船として大西洋横断に成功した最初のも
のである。英人は之等の人々皆其同族人種なるを見て狂ふ
ばかりに喜んだ。

14 ボーロ(マルコ)コロムバス(クリストファ)

マルコボーロ東洋に來り元朝忽必烈に仕へた。コロムバスの遠航はマルコボーロの跡に刺戟されたとの事。

14 世界の霸王、心靈の霸王

ローマの世界征服また中世ローマ法王の宗教界に君臨した
こと。

16 オリエント

Ex Oriente Lux(光は東より)

著者はオリエントといふ語のいかにも好調なのを好く。
オクシデント(西)の語も同じくよろしい。

16 名工レニ、

伊太利の畫工ギド、レニの筆曙の女神(オーロラ)の名高き壁
畫(天井の壁畫)がローマにある。

18 エニスの公子

即マルコ、ボーロ

22 詩美の國

古のギリイス國

23 イサス、アルベラ云々

アレキサンダア大王がベルシャ軍を敗りし戰場。其後軍を
進めて印度に入つた、インダス、オクザスのほとりまで進みし

23 脂粉三千

後兵卒が前進を拒むので退陣した。

アレキサンダー大王ペルシャを破り其皇宮に入り皇女を納れて妃とした。

24 妖婦の聲

美人タイスの言に従ひ酔狂のアレキサンダー火を放ちてパリのポリスの大宮殿を焚いた。恰も頂羽が阿房宮を焚いたやうに。

24 詩聖

ホーマアの詩巻をアレキサンダー常に陣中に携へた。

24 オリインボスの十二神

グレイスの美術家がオリインボス山上に住める神々を彫刻した其影響はアレキサンダーの印度征討の結果から東洋に及むだこと夥しい。

26 哀蟬の曲秋風の歌

共に漢の孝武帝の作、—左を『古詩賞析』の註解から抜く。王子年拾遺記に曰ふ。

「漢の武帝李夫人を懐ふてまた得べからず、時に昆靈の池を穿ち翔禽の舟を泛べ帝自ら歌曲を作り女伶をして之を歌はしむ、時に日すでに西に落ち涼風水を激す、女伶の歌聲甚だ適し、

因て落葉哀蟬の曲を賦して曰ふ。

「羅袂兮無聲。玉墀兮塵生。虛房冷而寂寞。落葉依乎重扃。望彼美之女兮。安得感余心之未寧。」

秋風辭は「秋風起りて白雲飛び、草木黃落して雁南に歸る」に初まり「歡樂極まりて哀情多し、少壯幾時ぞ老を奈何」に終る有名之歌である。

26 蠻族次第に西に馳せ

匈奴武帝の遠征軍に逐はれて次第に西に去つた、其の結果所謂民族大移轉とローマの瓦解とを來した。

31 半島イベリヤ

スペイン及びポルトガル

32 老雄の使

伊達政宗 ローマに使者一團を送つた。支倉常長は其長であつた。

33 ファイリツブ、フランソア

支倉がローマ法王より賜はりし名——支倉の畫像今に伊達家に保存せられる、頗る立派の作である、勿論當時のイタリヤの名工であらう。

34 瓊の浦

長崎港

34 紅毛の人

和蘭人

34 南洋の天領

スマトラ、ボルネオ、ジャワ等當時皆和蘭等に掠められた。

37 ビグミイの國

ビグミイは侏儒曰ふ迄もなく日露戦争以前の日本は歐米の人士の殆んど度外視したものであつた。

39 ドナウの帝城

キーン市、—ダヌンチオ飛行機上よりこの市に數萬の機文を投下した。

47 北冥の巨魚

莊子の巻頭にある話

51 天馬の道に

本篇の題名はこれから取る、但し此天馬は支那の時に曰ふ天馬では無い(それは只駿馬のことである)グリースの神話にある空飛ぶベガサスを指すのである。

55 フルトン

蒸気船成就して初めて大西洋を航せんとした時學者も俗人も一齊に嘲弄して空想の甚しいものと笑つた。或學者は曰ふた。「絶妙の工夫だ、しかし海にどうして路を作るのだらう」

59 クトノス、メン、アイス、テールトロン、ヘリコメン、ペドン、

グリイスの大悲劇家エスキュラスの傑作「プロメイトイスの罫縛」劈頭の句「大地の遙き遠き郷にいたりぬ」

59 ハルン

東京の文科大學に英文學を講じて我々を教へられた小泉八雲先生の原名、——先生の著書は（日本を寫されたのが大部分）盛、歐米に行はれる、そして修養ある歐米人士が日本を愛し日本を研め日本に來訪するのに與つて非常に力がある、日本國民は先生の名に對して毎に感謝を捧げねばならぬ。

63 メシナ、ナポリ

伊太利の南部、ナポリ以南メシナ及びシ、リイにわたりて風景尤も美しい。

63 タオルミナ

シシリイ島の南岸タオルミナは昔のマグナグレシヤ即チグリスの植民地であつた。當時の劇場のあと今も残る、エトナの山を仰ぎ藍光の海に臨んで絶佳の名勝地、歐洲の畫工は大概こゝを巡禮的に音づれる、著者の「東海遊子吟」の中こゝを詠じた一長篇がある。

65 ラゴ、マデヨール

伊太利北部の名高き湖

65 山は黄金の名に出で、

金華山、——著者は天下の山水癖ある人々に金華山の來訪を切に勧めたい、其頂上の景及び頂上より燈臺及び海岸を一週する途上の景は雄大といはるか豪壯と曰はるか奇抜といはるか殆んど形容の辭句がない。

69 千チアノウ

即ち千チアノウ、エツキオ(英語讀みにはチチアン)エニス派の首領、色彩の豊麗はラファエルも及ばぬと曰はれた、恰度百歳で逝いた。(一四七七——一五七六)

70 邪神雌伏の圖

71 二十五菩薩來迎圖

北齋八十五歳の筆、向島牛御前の神社の拜殿にある、筆力の豪健なること青年時代にも優りて驚嘆すべき極みである(横山健堂君の論文より)

高野山所藏國寶たる本圖は慧心僧都の筆と傳へられた、イタリヤ全盛時代の傑作に比すべきものと或る鑑賞家は著者に敬へた。

72 チマブエ、チヨット

チマブエ(ジオーバンニ)一二四〇—一三〇二、フロレンスの名工にて所謂フロレンス派を起した運動の先驅者、彼の壁

畫は頗る美はしい。
デヨットは畫家彫刻家建築家を兼ねた名工、前者の高弟であつた(一二七六一—三三六)慧心僧都は(九四二—一〇一七)

88 ゴンクイル

佛蘭士の小説家並に批評家、日本の繪畫を西洋に紹介した功は重に彼に歸するであらう。

74 シヤバンヌ、モロウ、

ンヤバンヌ(一八二四—一八九八)
モロウ(一八二六—一八九八)

前者の傑作はパンテオンの壁畫等、後者の殆んど八千點の作

品は彼が巴里市に寄贈したモロウ美術館にある、兩者共に東洋美術の影響を受けた。

81 空に横ふ一赤幟

一面異斯爲人、心異斯爲文、横空一赤幟、始足張吾軍「袁子才讀書の詩

81 鼎が浦

小山東助君は陸前氣仙沼の人、鼎が浦は同所の佳名である、

88 絹張山

鎌倉の絹張山にむかし頼朝錦織を張りて政子を慰めたといふ故傳である、

92 薤露の歌(漢代の詩)

「薤上の露何ぞかわき易き露かわけども明朝更にまた落つ、人死して一たび去らば何の時か歸らん」

92 五稜の衣

「同學の少年多くは賤しからず五稜の衣馬自ら輕肥(杜甫)」

93 マチイニ

伊太利の愛國者、豫言的革命者、文豪、彼は熱烈の信仰を有した。本篇の後段にもマチイニを讃してゐる。

95 眞島博士の愛兒

東北帝國大學は學者の淵藪として世界の學界に知られてゐる。

118

ヒンデンブルグ巨像のほまれ

眞島博士は其理學部の教授で、漆の研究に關して學士會院賞を受けた、同君の愛兒實君は珍らしく伶俐な子であつたが、ヘルニアの手術の結果惜しくも逝いた。博士及び令夫人が今日信仰深きクリスチャンとなつたのは實君の平素の言行と末期に感動した結果であるといふ。

122

A B Cは何の意か

America, Britain, China

獨逸の連勝時代國民の熱情はヒンデンブルグの木製巨像を立てた、今は之を破壊したそらだ。

133 隨園の嘆

「不貴安所窮、年々買如珠」小倉山房集卷五

126 サイレンの聲

海中の妖女サイレンの眩惑の歌聲之を聞くものをして恍惚
たらしめ舟を危岩に碎けしめ水夫を悉く溺れ死なしむ(ホ
ーマアの「オデッセイ」中にある話)

126 皆ブルジョアの幻影

マルクス一派の唯物論者は「神、人道等は皆中産階級の胸中に
湧く幻影だ」と曰ふ。著者はこゝにマルクスの經濟、財政、社
會、及び政治論に付いては何も日はぬ、されど彼の唯物論無神

130 アゼンスの聖

論を最も怖るべき戒むべき妄説であると信ずる。

ソクラテス其哲學を身に實行した人

130 ペンシイレ

「思想と行爲、神と人民」これがマチイニの標語であつた「思想と
行爲」といふ題名の雑誌を刊行したこともあつた。

131 其心臓を開き見よ

マチイニ自らの言「わが心臓を開き見よ、イタリヤといふ字が
そこにあらう」

136 頌學

136 文豪

英國の大化學者サア、オリバー、ロッチ、國界の人との交通を説く、英國の大小説家ジョージ、エルズ世界大戦を題目にした小説を書いてる中に曰ふ「在來神學で教へたやうな神は無い、われは有限の神を信ずる」

142 一切の敬を敬せむ

著者のモットウである、諸宗教の信徒熱心の餘かは知らねど「基督退治」とか「佛敎亡國」とか互に誹り合ふを著者は最も苦々しく最も痛々しく感ずる者である。

143 八萬四千鳳毛に非ず

碧巖にいふ「八萬四千鳳毛に非ず、三十三人虎穴を探る」

146 今わが前に披かる、

著者所藏の紺紙金泥の金剛經はむかし某大藩の後室が逝きし夫君追善のため寫したものと箱書がある。

154 常不輕の功德

法華經「常不輕菩薩品」あらゆる、誹謗冷笑を顧みずあらゆる人に作禮して「我れ爾を輕んぜず、爾當に佛と成るべし」と曰ひ従つて常不輕と呼ばれた人が此功德により後ち自らも作佛した、それが即ち釋迦如來の前身である云々。

157

ホモイウーシオン、ホモウーシオン

中古キリスト教會を分離せしめた争論、キリストは神と同じ質か、等しき質か云々、即所謂「同質論」「等質論」の争。

158

アメロンゲンにすくまれる

そのむかしキルヘルム大に黄禍説を唱へ、自ら歐洲諸國民聯合してアジアの異教徒征伐に向ふ畫をさへ書いて之を公にした。

162

顧みれば

八十華嚴の卷七「世界成就品」

163

正法誘る極悪人

167

歌ふミニオン

同經卷二十七「十廻向品」

ゲニテの「キルヘルム、マイスタア」中にある有名のイタリヤ懐郷歌。

チトロローネン、オランゲン、ミルテ、ロルピイレわざとゲエテの原語をこゝに用ゐた。

168

サンタ、クローチエ

聖十字院、フロレンスの名利、こゝにイタリヤの諸の偉人の墓があるダンテの墓はラベンナにあるがこの寺の中に彼の紀念像がある。

177 オレリアス

マアカス、アントニナス、オレリアス 羅馬の聖人皇帝(一二一
一八〇)

「異教並に基督教のいづれの帝王も此君に優る聖徳がない」と
迄日はれた帝王、ストイク派の哲人「冥想録」を書いた。

177 宸濠の亂

宸濠は明の皇族、賢夫人の諫を聴かずして謀反し、王陽明に平
げられた。

180 青蓮

李太白別號を青蓮と曰ふ、五十餘篇の「古風」は彼の一代の本領

だるう。

183 西に光蔽ふ

勿論チャイルス氏(英)またグルーベ氏(獨)の支那文學史中に李
杜の名と一二の詩は引かれてる、しかし一般の歐米人は此二
大詩人の天才を夢にも知るまい。

185 カルララの山

大理石の山、是山より切り出した石でミケランジェロはモー
ゼスの巨像等を作った。

186 アテイネイ

パラスアテイネイ 即 ミネルバ女神、金甲を着て生れ出でた

←→ 註 に 道 の 馬 天 ←→

188

萬神堂

と傳説さるる、生れながらの完成の譬喩になる。

189

アイキヤンゼル

ローマのパンテオンにラファエルの墓がある。

天使の長

189

チチアノ、コレジオ、チントレト

皆流芳百代の名匠

190

ペトラルカ

以下皆イタリヤの大詩人

(了リ)

大正九年四月廿九日印刷
大正九年五月二日發行

(天馬の道に 奥付)

定價金壹圓四拾錢



不許複製

著者 土井林吉

發行者 株式會社 博文館

右代表者 取締役社長 大橋進一

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 青柳十一郎

印刷者 株式會社 秀英舎第一工場

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所

發行所

東京市日本橋區
本石町三丁目十六番地

株式會社 博文館

振替貯金口座東京二四〇番

土井 晚翠 君 著

(株式博文館發行)

晚翠詩集

〇〇〇 三六版洋裝函入美本
紙數五百九十餘頁

正價金壹圓六拾錢 送料金八錢

「暮鐘」「星落秋風五丈原」「黑龍江上の悲劇」等人口に膾炙せられ殆んど國文學上のクラシックたるもの此集中に在り、「セイヌ江上の別離」カムパニヤの懷古、南歐メシナの詠懷等著者の特色を發揮したる此集に在り、雄大壯麗、天風海濤の韻は、茲に始めて讀者に供せらる。

文學博士 姉崎 正治 君編

正價一圓八十錢

送料八錢

文は人なり

四六册 全一册

内容	
第一期	憧憬の時代
第二期	自信の時代
第三期	煩悶の時代
第四期	信仰の時代

附格の人物
高山樗牛

一代の文豪として幾多の憧憬者、非者を有する樗牛の遺稿中から其粹なるものを選び、そのものを蒐めたるもので、更に舊版に洩れた日蓮關係の文章や、樗牛嘲風の往復した書翰を新たに増加してある。

株式博文館

厨川白村 共編
細田枯澤

趣味の文がら

正價壹圓拾八錢

送料八錢

警拔な文章、多感な思想、殊に著者獨得の境地ともいふべき「女の日記」「壁訴訟」等は巧に女子に扮して其性を掩ひしもの由來性を移して斯く成功したるは妙し、眞個現代文壇の一異彩たり

文學博士
萩野 由之 著

史話と文話

正價壹圓八拾錢

送料十二錢

博士が吾が國民一般に國史國文の趣味を鼓吹すべく叙述せられたるものにして、日本歴史上の史實と文事に關する所説五十篇を收む史論あり隨筆あり月旦あり咸なこれ金玉の名篇歴史研究者の資料なり

天地有情

袖珍形 洋裝並製
定價五拾錢
送料四錢

文學士 土井晚翠君著

巖々の山、洋々の水、以て晚翠君の詩を評すべし、此編は實に君が今日迄の吟哦を録したるものにして、新體詩中別に一旗色を樹立するもの、詞華爛漫誠に詩壇の光輝たるに背かず請ふ愛讀を玉へ。

美文韻文 大町桂月君著
黃菊白菊

正價六十錢
送料六錢

散文韻文 大和田建樹君著
雪月花

正價七十五錢
送料六錢

●●●●●●●●
株式會社 博文館

391
97

終

